教行信証における「ヒト」と「モノ」
―「者」の訓をとおして―

東辻保和

目次

序　小稿の意図
第一節　「者」とその対象
第二節　「者」とその対象
第三節　結びに代えて

序　小稿の意図

教行信証は改めて言うまでもなく、親鸞が多くの経論釈疏を引証することによって、浄土真宗の教理の体系化を完成したものであり、本文は漢文体である。現存する親鸞自筆の坂東本には、詳密な訓点が施されていて、それによって、親鸞が原漢文をどのように訓読したかを知ることが出来る。坂東本の漢文訓読史上の位置付けは、夙に小林芳規博士によって明らかにされているところである。(注1)

さて、坂東本における「者」字の訓法について、小林博士は次の如く述べられた。(注2)

(一)「者」を直接「者ガ」「者ハ」の如く固定訓として用いて不読としない。これは平安時代の一般には見られない訓法である。

(二)名詞としての訓には、「ヒト」と「モノ」の訓があるが、「ヒト」は人物に訓じ、「モノ」は事物を訓ずると共に助字「者」を訓ずる。これは一見平安初期の訓法に似ているが、助字「者」を「モノ」と訓むことは新しい訓法であって、「ヒト」の訓と併せ勘えると、他の仏書とは異る訓法である。

この博士の御説明によると、一見、坂東本には人

物に訓じた「モノ」の例が無いかの印象を受けるのであるが、実際には次の如き例が存する。

1 時提婆達多即便法至三十三天従彼天人而求索之其福盡故都无與者（注3）（三〇五3）

2 如王所言世无良醫治身心者（二六六1）

3 又言願往生者本則三三之品今无一二之殊（三四五4）

4 冥感至聖国覩神光者凡二百餘人（六五六5）

5 況汝麁人食唾者乎（三〇七3）

6 求虚責実信矯盲者之言耳（六四二8）

ここで触れておかねばならないものに、博士の説かれた「辞訓の詞訓化」の事象が存する。「辞訓の詞訓化」とは、博士によれば、「助字「者」において、訓としては単に接続助詞「バ」でよいものまで「モノ」と画一的に訓ずるよう」になる現象をいう。（注4）

7 雖言地獄餓鬼天中誰有見者（二七〇4）

8 我問大梵王誰昔護持者（六二五1）

これらの「者」は、牛島徳次博士によれば、「語気強調」の添詞であり、又、

9 従熟蘊出醍醐醍醐最上若有服者衆病皆除（四二四7）

10 若欲捨専修雑業者百時希得一二千時希得五三（五〇三5）

これらの「者」は「条件強調」の添詞であり、又、

11 夫範衛一如以流化者法王光宅四海以来風者仁王（五五八5）

この「者」は「提示」の添詞に当ると考えられる。かかる助字を画一的に「モノ」と訓ずる現象を小林博士は、漢文訓読史上に「辞訓の詞訓化」として規定せられたのである。ただ、この漢文訓読史上の変遷を単に形式的のものとして把捉するだけでは十分でないであろう。「詞訓化」するということは、それによって、訓読文が原漢文の意図する表現内容よりも一層隔ったものとなることを意味する。即ち、上に掲げた例文7～11の訓読文について見れば、

「詞訓化」することによって「者」は助字性を喪失する反面、人物を意味する「モノ」に転ずる可能性を孕むことになるのは、自然の勢と言ってよいであろう。助字の訓読法の変遷は、実は、助字から「実詞」へ[注6]という質的転化を伴っているのである。但し、「詞訓化」した「者」がすべて人物を表わすわけではない。例えば、

12　急走急作如炙頭燃者衆名雑毒之善（一七一2）

13　受果報者名之為有（二九五7）

これらの「モノ」は、「コト」に置き替えることが可能である。

さて、このように「詞訓化」した「者」が転じて人物を表わすか否かは、文脈によって決定せられることであるが、坂東本の「者」には、人物を表わすと考え得る事例が数多く含まれる。この詳細は次節に述べることにしたい。

以上の如く、人物を表わすのに「ヒト」と「モノ」との両訓が用いられているとすれば、そこに何らかの弁別の規準が存在するのではないかと推測される。小稿では、その点を討究してみたい。

第一節　「者」とその対象

まず坂東本に拾い得る「者」「者」の例数を掲げておく。

「者」……一五三例
「者」……二四例
「何者」……一四例

次に、これらの事例は、左記の諸仏書からの引用の中に認められる。[注7]

無量寿経　観無量寿経　阿弥陀経　大阿弥陀経
無量寿如来会　無量清浄平等覚経　北本涅槃経
大方等大集経　首楞厳三昧経　道地経　悲華経
大悲経　般舟三昧経　大灌頂神呪経　薩遮尼乾子経　大乗大集地蔵十輪経　十住毗婆沙論　無量寿経優婆提舎願生偈　弁正論　浄土論註　観無量寿経疏　浄土五会念仏略法事儀讃　往生礼懺　無量寿経連義述文賛　天台四教儀　往生要集　安楽集　讃阿弥陀仏偈　楽邦文類　龍舒浄土文　末法燈明記　法界次第初門
及び親鸞の正信念仏偈並びに自釈を含む。

さて、「何者」については姑く措くとして、「者」の表わす対象について分類してみることとしたい。

(一) 「事物」を表わす

14 十念者重重者先牽能出三有（三二三6）

15 然德無不備者謂之為涅槃（六五七2）

16 乃出九十五種之邪道雖入非濁權実之法門眞者甚以難実者甚以偽者甚以多虛者甚以滋（四七三ク・8）

17 五眼圓照六通自在観機可度者（一六九3）

18 如海性一味衆流入者必為一味海味不隨彼改也（四四〇7）

19 智无不周者稱之為仏陀（六五七4）

(二) 「人物」を表わす

(ア) 「衆生」等

20 其有衆生遇斯光者三垢消滅身意柔濡（四〇〇6）

21 雖度无量衆生実无一衆生得滅度者

22 於諸衆生不観種姓老少中年（中略）婢使唯観衆生有善心者（三八九7）（三八四4）

23 若有諸衆生得聞是語者若信及不信定知是仏説（三〇〇1）

24 若見色貌一切衆生无與等者當知是則為如来也（四三七8）

25 諸仏世界衆生之類蒙我光明触其身者身心柔濡起過人天（二四三3）

26 群生見者罪皆除（三四八6）

この類は全部で廿一例を数えるが、すべて「モノ」と対応している。

(イ) 「人民」

27 諸天人民莫不聞知聞知者莫不度脱也（四〇八1）

(ウ) 「王」「君」「臣」「公卿」

28 如是等王皆害其父悉无一王生愁悩者（二七〇3）

29 郭荘云時之所賢者為君我不稱世者為臣（六四一8）

30 朕捨外道以事如来若有公卿能入此誓者各可発菩薩心（六六四5）

(エ) 其他、対象を特定するもの

31 阿闍世者即是具足煩悩等者（二八〇6）

32 諸比丘僧聞仏言皆心踊躍莫不歓喜者（三三5）

33 諸天人民蝡飛蠕動之類聞我名字莫不慈心歓喜踊躍者皆令来生我國得是願乃作仏（三〇2）

このほか、上掲の例1（「天人」）、2（「良醫」）もここに該当する。

(オ) 「自力」であるもの

34 眞知專修而雜心者不獲大慶喜心（五四八6）

35 是知雜修之者為執心不牢之人故生懈慢國（四八五2）

このほか、上掲の例10「欲捨專修雑業者」もここに該当する。

(カ) 「〔　〕ノ者」

36 世間諸有婬泆瞋怒愚癡者（四〇七3）

37 故分別生滅者如化不生不滅者不如化邪（四六〇5）

38 無有如是智慧之者（五八六5）

39 汝観殊勝智者（四八〇4）

40 當知彼化生者智慧勝故其胎生者皆无智慧（四七八8）

41 諸有智者應知（四六〇8）

42 於放逸者仏則慈念　不放逸者心則放捨　（二八三8）

43 何以故有有見者得果報故　（二九六2）

44 无有見者則无果報　（二九六3）

45 懈怠之人則為非有　无懈怠者則為非无　（二九五7）

46 常見之人則為非有　无常見者則為非无　（二九六4）

47 是故常常見者不得為无　（二九六6）

このほか、上掲の例35「雑修之者」もここに該当する。

右の例43～47は、北本涅槃経よりの引用であるが、中でも45・46は、「懈怠」対「无懈怠」、「常見」対「无常見」の夫々が「人」対「者」に使い分けられているところに注目される。原漢文の構文としては、この「者」はいずれも提示強調の助字と認むべきものであろうか。しかしながら、「詞訓化」して「モノ」と訓読されることによって、「ヒト」と「モノ」との対立（殊に「无―」に「モノ」が接している）が生じる点に、原漢文の直訳ではない日本語化が窺えると思うのである。

以上六項のほかにも、種々の状態や動作の主体を表わす「者」が少なからず認められるが、分類が困難であるので、若干の事例を掲げるに止める。

48 所有行法・住法・順法・猒捨悪者今悉付囑汝等手中　（六一八7）

49 眞宗簡要念仏奥義抵在于斯見者易諭　（六七五5）

50 譬如阿修羅等雖无鼓者而音曲自然　（三九〇2）

51 論浄土者常多得其要而直指者或寡　（二三〇6）

第二節　「者」とその対象

全事例を分類整理してみると次の如くなる。

(一)「仏」「諸仏」「世尊」「菩薩」「人天大師

52 若无諸仏菩薩説世間出世間善道教化衆生者

豈知有仁義礼智信邪（三一九7）

53 應知為人天大師堪受化者是誰（三五九1）

次の「者」四例も、「仏」「諸仏」「世尊」との関係において呼ばれたものと考えられる。

54 如是罪者除仏更无能除滅者（三一二6）

55 今日世尊住奇特法依神通輪所現之相非唯異常亦无等者（二一2）

56 常念如是諸仏世尊如現在前三界第一无能勝者是故多歓喜（四四5）

57 无上者言此道窮理盡性更无過者（一二二3）

（二）「能神者」「至心者」（阿弥陀如来を呼ぶ）

58 夫須弥之入芥子毛孔之納大海豈山海之神乎毛芥之力乎能神者神之耳（四四五1）

59 諸聞阿弥陀徳号信心歓喜慶所聞乃暨一念至心者回向（一六八6）

（三）「念仏者」

60 若念仏者當知此人是人中分陀利華（二四四8）

61 仏告迦葉菩薩若有善男子善女人常能至心専念仏者若在山林若在聚落（中略）諸仏世尊常見此人如現目前（二四六2）

62 若能相続念仏者此人甚為希有（二五二3）

63 若念仏者即是人中好人（二五二7）

（四）「行法者」

64 迦葉亦如是已囑四天下梵釈護世王護持行法者（六二七5）

（五）「説法者」「聽法者」

65 於説法者作醫王想作拔苦想（中略）若能如是説者聽者皆堪紹隆仏法常生仏前（二四五2）

66 其聽法者作増長勝解想作愈病想（二四五2）

以上の五項は、(一)(二)は一切衆生を救済する主体、(三)は、浄土教信仰にあって第一の行とされる専修稱名念仏の行を実践する者、即ち救済される主体、(四)(五)は、共に仏法を紹隆させる者である。これらはいずれも阿弥陀仏・他力的信仰世界の存立発展のために不可欠の根本条件であると言えよう。これらには「モノ」が用いられていない。

(六) 其他

67 如是等類大威徳者能生広大仏法異門（一六四4）

（同文が二四四7にも見えるが、「又言如是等類大威徳者能生大異門」となっている。共に無量寿如来会からの引用である。）

「大威徳者」は、他力信心の者を賞めたことば、「広大仏法異門」とは、弥陀浄土のことで、文全体は、他方仏国有情の阿弥陀信心を賞讃したものである。

68 一切善悪凡夫人聞信如来弘誓願仏言広大勝解者是人名分陀利華（一四七6）

「広大勝解者」は、すぐれた他力信心を得た者のことであり、阿弥陀如来の本願を信ずる「一切善悪凡夫人」への讃辞である。

69 観経義云（中略）正受金剛心相応一念後果得涅槃者（二二三）

ゆるぎない他力信心により弥陀本願の誓旨にかない、その結果常住絶対の真実即ち真如を得る者のことをいうのである。

70 寄語現前大衆等同縁去来者早相尋（九二3）

71 普勧道場同行者努力回心帰去来（九一5）

この二例は、いずれも仏道修行者のことをいう。「同行」は真宗では信者の意に用いるという。（注8）

この項の諸例を通じて言い得ることは、すべてに阿弥陀仏信仰を懲懲しようとする精神が認められるということである。これには「モノ」は用いられていない。

以上のように、「モノ」と「ヒト」とは使い分けられているのであるが、一部に区別のなされていない事例も存する。

72　三十六部神王万億恒沙鬼神為眷屬陰相番代護受三帰者（六三三8）

「受三帰」は三宝に帰依することで、これは仏教徒としての根本条件なのである。そこに「ヒト」が用いられている。一方、これの類例に、次の如く「モノ」の用いられた事例も存する。

73　経云帰依於仏者終不更帰依其餘諸外天神也（六六七3）

74　又云謂帰依仏者終不墮悪趣云（六六七4）

又、

75　安楽浄土諸往生者无不浄色无不浄心（四四一2）

では「ヒト」と訓じられているのに対して、

76　願往生者本則三三之品今无一二之殊（三四五4）

77　願往生者皆得往生唯除五逆誹謗正法（三一七2）

78　願聞十方諸有緣欲得往生安楽者普皆如意无障碍（四五一8）

79　若稱仏往生者常為六方恒河沙等諸仏之所護念（八三2）

これらでは、「モノ」と訓じられている。76 77 78は「願往生者」「欲得往生安楽者」であって、「往生者」とは異るところにその原因が存するのであろうか。あるいは又、79の「者」は、「辞訓の詞訓化」（バ→モノ）が75の「往生者」とは異った訓として残存したものであろうか。

ところで、「者」二十四例について、上とは異った観点から考察してみよう。まず各用例をその出典別に配列すると、次の如くである。上は用例番号、下は出典である。

52 53 57 58 75　（曇鸞「浄土論註」）

55　（憬興「無量寿経連義述文賛」）

56　（龍樹「十住毗婆沙論」）

59　（曇鸞「讃阿弥陀仏偈」）

62 63 69　（善導「観無量寿経疏」）

68　（親鸞「正信念仏偈」）

70 71　（「般舟三昧経」に依る慈愍和尚作の偈）

80　（道綽「安楽集」）

54　（「北本涅槃経」）

60（「観無量寿経」）
61（「安楽集」所引の「北本涅槃経」取意文）
64（「大集経」所収「月蔵経」巻七の偈）
65 66（「安楽集」所引の「大集経」取意文）
67 (67)（「無量寿如来会」）
72（「淮頂経」）

此に依れば、前半「80安楽集」までの一五例は、論疏偈賛の類であって、経典本文からの引用は含まれていない。後半九例は経典の引用であるが、その中、64は偈である。又、内容的に見るのに、54「除仏更无能除滅者」、60「念仏者」、61「專念仏者」、65「説法者」、66「聽法者」、67(67)「大威德者」、72「受三帰者」の如くであり、「往生者」は含まれない。就中、60 61 65 66 67 (67)の六例は前述の如く、阿弥陀信仰において特別の意味を担う語かと考えられる。又、釈尊の会話に見える語でもある。

一五例対九例という数字は、統計的には有意差とは言い難いが、これが全例であるから、この差を記憶しておきたい。

そこで、先程の、「者」の用いられた事例（73 74 76 77 78 79）を再検討してみるのに、この中73 74は共に「涅槃経」、76は「浄土論註」に所引の「観無量寿経」取意文、78は同じく「浄土論註」に所引の「無量寿経」本文、79は善導「往生礼懺」所引の「阿弥陀経」本文の夫々引用であって、これらは悉く経典本文中の語句であるところに共通性が認められる。たゞ77だけは、曇鸞「讃阿弥陀仏偈」の引用であって他と異る。

以上の、意味及び出典の両面からの考察の結果によれば、「者」の「ヒト」「モノ」の訓じ分けは、主に論釈疏偈賛の訓読においてなされ、経典本文の訓読においては、特定の語を除いて訓じ分けをせずに、「モノ」と訓じられた傾向が窺われる。

第三節　結びに代えて

「者」が人物を表わす場合について、第一、二節に述べたところを纏めて表示すれば次の如くなる。

「ヒト」の対象	「モノ」の対象
仏　阿弥陀如来 世尊　菩薩　人天、大師 念仏者　行法者　説法者　聴法者 大威徳者　広大勝解者　得涅槃者　同行者　同縁者	衆生　群生 人民　天人　良医 王　君　臣　公卿 阿闍世　比丘僧 「自力」である者
受三帰者　往生者	帰依仏者　願往生者　欲得往生安楽者　往生者
〔「ヒト」の対象〕外の不特定者、「〜ノ者」	

「ヒト」と「モノ」との対象の分布状況は、概ね相補関係をなしている。

既に述べた如く、浄土教信仰の根幹をなす阿弥陀如来並びに諸仏諸菩薩を始め、念仏者、行法者等、浄土教の信徒が「ヒト」と呼ばれる対象となっている。即ち、「ヒト」はこのように限定的に用いられているのに対して、「モノ」は、広く人間世界の階級、職業、賢愚善悪の別無く、救済されるべき一切衆生を表わすのに用いられていると考えられる。

しからば、「ヒト」と「モノ」とには価値の差があると判断してよいのであろうか。

筆者は、以前に、平安時代の和文を調査した際、「モノ」には、「下降性・軽易性」が認められるが、「ヒト」との価値の差が大きかったとは考え難い旨を述べたことが有る。(注9) それでは、坂東本の場合はいかがであろうか。

80　安楽集ニ云フ（中略）何者欲使前生者導後生者訪前連続。无窮願不休止。（六七九3）

この例に関する限り、「モノ」と「ヒト」との使い分けは、同語反復を避けようとする避板法によるところではないかと考えられる。又、

81　若奪衣鉢、又奪種種、資生、具者、是人則壊三世、諸仏、真実、報身、（六三一3）

この事例について言えば、「者」は助字で、したがって「モノ」と訓じるのは訓法上「辞訓の詞訓化」と認められようが、ここの文脈では、助字性を喪失して実詞性（即ち人物を表わす「モノ」化）を得ていると解釈されよう。更に言えば、親鸞自身がそのような語意識を持っていたと推察することが、あながち不当とは言えないならば、本例において、「奪衣鉢……者」と、それを指す「是人」とが相前後して用いられていることも、両語の価値の近似を暗示するもののように考えられるのである。

（注）

1　「漢籍訓読語の特徴――群書治要古点と教行信証古点・法華経古点との比較による――」（訓点語と訓点資料二九輯）、『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』第一章第二節

2　前掲書の四四二頁～四六〇頁参照。

3　『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館）本の頁・行を示す。以下同じ。

4　前掲書の四五八頁参照。

5　『漢語文法論（古代篇）』（大修館書店）の二四六頁以下参照。

6　小林芳規博士の前掲書、二二頁参照。

7　『親鸞』（日本思想大系、岩波書店）の頭注補注に依るところが極めて多い。ここのみならず同書から得るところ甚大なるものがあった。衷心より謝意を表する。

8　中村元博士編『仏教語大辞典』に依る。小稿を草するに当り、同書から多大の学恩を蒙った。衷心より謝意を表する。

9　拙稿「漢文訓読語の一面――「者」を「モノ」と訓むことの意味――」（『大坪併治教授退官記念国語史論集』（表現社）、二五一頁）参照。

（付記）
稿の成るに当り、小林芳規先生の御示教を仰ぎました。記して感謝の意を捧げます。